



チーム医療推進に貢献する

監 事 齋 藤 京 子

この晩冬から初夏にかけてめまぐるしい気温の変化であった。朝は春暖かと思えば夜は厳寒に戻り、暑さ寒さを着衣でこまめに調節してやっとしのいだ感がある。暖冬冷夏などそれぞれの春夏秋冬をくりかえし、私が核医学検査に一步を踏み出してからおよそ35年になる。35年前は関連する書籍も少なく、スキャナーやレノグラム装置、甲状腺摂取率装置が稼働していた。その後、ガンマカメラ、SPECT装置の普及、新しい放射性医薬品の供給、画像解析ソフトウェアの開発などがうまく絡み合い、放射線科医、臨床医、診療放射線技師、理工学者、放射性医薬品メーカー、機器メーカーなどの技術者がそれぞれの得意とする専門的知識・技術を駆使し核医学の発展期を迎えた。最近ではFDG-PET検査が普及し、この4月からセンチネルリンパ節生検の診療報酬算定がやっと可能となり、核医学診療は治療方針の決定や治療効果判定に大きく貢献している。生命科学の進展、医療技術の高度化、医学に求められる社会からの要請は大きく変化し、医療専門職は時代の変化に即応する必要があると考える。

この4月30日に「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」の通知が厚生労働省医政局長から発せられた。現行制度の下において診療放射線技師が実施することができる業務として、①画像診断における読影の補助を行うこと、②放射線検査等に関する説明・相談を行うこと、が挙げられている。従来から、核医学担当技師は検査予約、放射性医薬品の発注、検査準備、画像収集・解析、機器管理、放射性廃棄物整理、放射線管理など核医学検査を総合的にマネジメントし、医療スタッフとの連携を図りチーム医療を実践している。この通知を機会に「チーム医療の推進に貢献する核医学専門技術者あるいは核医学専門技師」を改めて考えた。核医学検査の現実を利用する側の視点から分析すると、「核医学専門医が総ての施設に常勤しているわけではない不便さがある」、「核医学画像に慣れていないと読影しにくい」、「薬剤の性質や測定法の相違などにより算出された定量値の解釈が核医学専門医以外の医師には理解されにくい」、「患者や臨床医から検査等に関する説明・相談の問い合わせが日常的である」ことなどが挙げられる。一方、核医学担当技師は常に核医学に従事しているので、核医学専門医や臨床医に対し読影の補助が可能であるし、患者やその家族、臨床医に対し検査説明・相談に即応可能である。もちろん、チーム医療推進に貢献するためには各人が高い専門性を有していることが前提である。これを機会に核医学専門技術者、核医学専門技師の認知度アップにつながればと期待している。一人一人が高い専門性を磨き、維持するために学会に積極的に参加し自己研鑽をしていただく、学会の種々の制度を利用して研究を推進していただく、そしてチーム医療推進に貢献する人材育成の場を広げてゆく学会の活動を期待している。監事として、微力ながら学会の発展に貢献したい。